

Title	ウィットフォーゲル「支那の経済と社会」
Sub Title	
Author	伊藤, 秀一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.2 (1934. 2) ,p.245(65)- 252(72)
JaLC DOI	10.14991/001.19340201-0065
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340201-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウィットフォード「支那の經濟と社會」

伊 藤 秀 一

ウィットフォードの一九三一年の著作「支那の經濟と社會—アジア的—大農業社會の科學的分析の試み」(K. A. Wittfogel: Wirtschaft und Gesellschaft Chinas; Versuch der wissenschaftlichen Analyse einer grossen asiatischen Agrargesellschaft.) 第一卷の全譯が、最近平野義太郎氏監修の下に上下二卷の形で出版せられた。原著者が本書に於て試みて居る所は、標題の示して居るやうに、アジア的農業社會としての支那の經濟社會の全機構を、而して原著者が序言の冒頭に於て指摘し、邦譯書が其の標題に於て示して居るやうに、「現在完き解體過程にある支那の經濟と社會」とを科學的に究明しやうといふにある。併し乍ら既に公刊された前記第一卷(即ち邦譯上下)に於ては、未だ此の巨大なるアジア的社會の全機構(廣義の生産諸關係)が總體的に展開せられず、これが解明のための基本たる可きアジア的生産様式と、これを理解するための鍵たる可き生産諸力とこれが諸條件との分析が行はれて居るに止まる。勿論此の限りに於ても本書の重要性は充分認められなくてはならぬ。併し筆者の而して恐らくは多くの讀者がより大なる期待を持つ所のは、現實に「解體過程にある」支那經濟社會の全貌を分析せる第二卷である。而も此の科學的勞作の後編(第二卷)が、現在ナチスの暴壓政治の下に、その執筆の進行を妨害せられて居るといふこと

は、嘗て原著者が本書の資料の獲得に際して、各國の圖書館や研究所特にロンドンのスクール・オブ・エコノミックスの圖書館やフランクフルト・アム・マイン大學附屬の「社會問題研究所」等によつて非常な便宜と親しき援助を與へられたといふ事實(著者序言)に對比して、甚だ遺憾であると言はなくてはならぬ。

さて邦譯された前記第一卷に就て言へば、此の著作は疑ひもなく多くの問題を提供して居るとは言ひ、就中二箇の重要な若くは基本的な問題を含んで居る。其の一は本書に於ける著者の方法論的立場であり、其の二は分析の直接的對象となつて居る所のアジアの生産様式の問題である。

方法論的立場に就て言へば、歴史的發展を規定するものとしての自然的契機——本書に於てはアジアの生産様式の理解に不可離的に結び付けられて居る所の——に就ての著者の見解が先づ顧みられなくてはならぬ。ウィットフォードは此の方法論上の問題に就ては、既に早く一九二九年の論文「政治地理學・地理的唯物論・マルクス主義」(Geopolitik, Geographischer Materialismus und Marxismus. Unter dem Banner des Marxismus. Jahrgang III. Heft. Nr. 1. 4. 5.)に於て詳論して居る。(此論文の邦譯に、川西正鑑譯「地理學批判」がある。)

此論文に於て彼も亦「物質的生活の一定の生産内に要約され、且つその中に實際上表現される所の、一定の發展段階に於ける物質的生產諸力が、社會的・政治的及び精神的生活過程を條件づける」といふ見解に立脚して居る。だがこの生産諸力の發展を條件づけるものは一體何であるか。彼によると、諸々の生産力はそれ自體の中に社會的契機と自然的契機とを包藏する。従つて生産諸力の發展を條件づけるものとして當然社會的のそれと、自然的のそれとを擧げなくてはならぬ。社會的條件は廣い意味では階級秩序、國家形態、法的關係、イデオロギーであり、狭い意味では、社會的生產諸力即ち勞働手段、勞働組織、勞働能力として生産過程に直接入り込む所の生産の社會的諸條

件である。だが同時に他方に於て是等の生産諸力を制約する所の自然的條件がある。故に人間の勞働は一定の社會的一般諸條件の下に行はれるものではあるが、同時に一定の社會的生產力によつて、その時々成立する生産段階に適應する所の自然の要素に働きかけて居るのである。斯くて社會的勞働が前記二種の社會的條件から離れて行はれることが不可能であると同様に、客觀的自然狀態を基礎とせずして、如何なる勞働過程も如何なる具體的富の創造も一般に不可能であるといふ事は明白である。「扨て然らば歴史的發展の過程に於て指導的であるものは何れの側面であるか。勞働の社會的形態を持つ所の人間であるか、それとも社會的勞働によつて作られざる、而して凡ゆる勞働の究極的・具體的の土臺たる自然であるか。」ウィットフォードは、此問題の解答を、マルクスに倣つて、「勞働は素材的富の父であり、土地はその母である」との命題に求め、此命題は「一切の富の二つの除去し得ざる原形成物(Urbildner)が二つの相互に原理的に異なる機能を遂行して居る」といふことを表現して居るものであると解釋する。而して彼によれば「勞働活動を有する人間は不休(Unruhe)即ち運動の契機を代表し、自然は、原始的の儘であつても、或ひは變更されたものであつても、客觀的土臺の契機を代表する。此の土臺はその具體的な構成によつて、右の活動に全然一定せる道を示して居る(或ひは又示して居らぬ)のである」と。此點に關して、彼が人間と自然との關係を辨證法的に理解せんとして居る事は明かである。彼は右の見解に結論を下して更に次の如く述べて居る。「若しも生産諸力の總體が一の歴史的瞬间の生産様式の特性を決定するものとすれば、能動的に働く要素として變化へと驅り立てるものは、是等生産諸力の中の社會的契機であり、而も斯かる變化が可能なりや否や、而も正に此の變化が如何なる方向に導かれるやを規定するものは自然制約的契機である。人間が自然を強制して彼に奉仕せしめんとする時ですら、人間は自ら自然に服従し(プレハーノフ)之に隨ふ。人間が歴史的過程に於て、自然的

環境を絶えず變更することによつて此の自然的環境の内に呼び起こす所の變化は、更に再び人間の上に反作用を行ひ、人間が、彼によつて變化せしめられた自然的環境に、同じく變更された方法で働きかけることを必要ならしむるのである」。(Unter dem Banner des Marxismus. Jahrgang. III. Nr. 5. SS. 718-724. 邦譯「二三—三四頁」)

右の論文に於て展開された如上の見解が、本書に於ける支那の經濟社會の分析に當つて、その研究方法上の基準をなして居ることは頗る明白である。本書序説に於ても亦次の如く説明されて居る。「凡そ生産諸力なるものは、社會的側面の外に、自然的な一側面がある。前者は、生産過程の内部に於て積極的な因子、即ち『父的』要因を、後者は『母的』の受動的な要因を形成する。前者は、實踐的に活動しつゝある人間が、彼等の歴史を、彼等の經濟史をも亦自ら作るといふことを示す。然るに後者は次の事を示す。なる程このやうに活動的な人類が彼の歴史を自ら作りはするが、併しそれは人類によつて作られなかつた全く特定の諸條件の下に、即ち其の具體的姿容は、社會的勞働の生産性と態様とに適應して變化するが、併しそれ等を構成する諸要素の一切の機能の諸推移にも拘らず、根本的に不斷に作用を及ぼし、従つて社會のより以上の發展の態様に對してはなほ決定的であるところの自然的諸條件の下に於てあるといふこと。」(上卷二頁)此の自然制約的な生産力の種々の構造から原始共同體の種々なる發展が生じたのであり、「アジア」地方に就て言へば、茲に特有なる自然制約的な事情、即ち此の土地に支配的な氣候及び土地關係から、全然特殊なる農業生産様式の發展が生じたのである。而して此の特有なアジア的生產様式の基礎の上に一種獨特の社會的・政治的・生活諸形態が發達し、又是等の生活諸形態に適應する所の獨特のアジア的なイデオロギーの成長が行はれたのである。アジア的社會に對する斯かる分析の立場に立つて、ウィットフォーゲルは、支

那の經濟過程の諸々の基本的特徴を指示すると共に、その遺制即ちアジア的生產様式の殘滓が、現在の支那の經濟社會に於て如何なる役割を演じつゝあるかを舉示せんとするのである。而も彼によれば、斯かる社會機構全體の有効なる分析は、彼の方法論的立場が示して居るやうに、「支那に特有な生産諸力の特質が確立せられてはじめて、換言せば、社會的に條件付けられた生産諸力及び此の生産諸力の發展過程を規定しつゝある、自然によつて條件付けられた生産諸力の特質が確定された時にのみはじめて遂行され得るのである。」(上卷四頁)。

斯くて本書(第一卷)の構造は次の如き順序によつて編成されて居る。

一、生産諸力即ち自然的に—社會的に條件づけられた生産諸力の分析。即ち

第一編 歴史的に考察した支那の生産諸力の體系

第一章 支那の經濟的過程に於ける、自然によつて條件付けられた生産諸力 (1)人類學的諸基礎 (2)外的な自

然的諸條件—土地、温度、水、工業の自然的諸基礎。

第二章 支那の勞働過程の社會的に條件付けられた生産諸力 (1)勞働過程の社會的組織 (2)支那人の勞働力上

の性能的特質 (3)前資本制的支那に於ける勞働手段。

二、生産過程、生産様式の叙述。即ち

第二編 支那の經濟過程の諸基本的特徴

(A)支那の經濟過程に於て支配的であつた農業生産様式の分析。即ち

第一章 農業的生產過程 (1)農業生産の物的—技術的方面(人工灌溉、治水組織、園藝的農耕等) (2)直接的農

業生産者の土地に對する關係(小土地所有、小作、徭役及奴隸勞働)

ウィットフォーゲル「支那の經濟と社會」

第二章 農業生産の干與機關としての國家 (1)治水事業・水利工事 (2)天文學

第三章 廣義の農業(牧畜、養魚、植林)

(B)支那の農業的發展の全貌を把握せんがために必要な「工業的」生産の基本諸要素の分析 即ち

第四章 前資本主義的支那の生産過程の工業的方面 (1)支那の農業社會に於ける工業上の欲求 (2)支那の工業

(その歴史的考察) (3)手工業及びマニファクチュア (4)社會内部の分業と工業的經營内部の分業 (5)手工

業的小經營 (6)家内工業 (7)早期資本主義的發展の萌芽

(C)右のために同様に必要な、商品流通並に貨幣流通がその中で行はれる所の諸形態の分析 即ち

第五章 「アジア的」支那に於ける運輸—商業—及び利附資本の經濟的機能 (1)運輸産業 (2)支那商業資本の經

濟的機能 (3)從來の支那に於ける高利貸資本、貨幣取引資本及び貨幣—金融業資本

右の各項目に亘つて詳細に紹介し且つ論及することは此の小篇のよくなし得る所ではない。而も全體的に言へば、單なる資料によつては論結し得ないやうな支那社會經濟史上の困難なる諸問題の解決に對して、本書が隨所に、その方法論的立場から即ち人類の物質的生産の發展運動の基礎から、明快なる展望を與へて居るといふことが特に注目されなくてはならぬであらう。一例を挙げれば、監修者が上巻々末の「跋」に於ても指摘して居る事ではあるが、何故支那の農業文化が地味のみ、肥沃な揚子江中流地方に發祥せずして黃河流域に、而もその平野地方ではなくて、黃河々谷に發したかの問題に對して、著者は、最初の移住中心地を決定したものは「土地の絶對的豊度ではなくて、寧ろ可能的な豊度、換言せば與へられた瞬間に(其の時々の發達狀態に於ける技術的手段を以て…筆者)開拓し得可き豊度」であつたといふ事を以て説明して居る。古代支那の移住民は斯かる土地に於て徐々に訓練を重ね、耕作

及び築堤技術上のより、高き熟練並に共同的集團勞働諸原理を獲得することによつて、總て黃河々口の平野に存在する所の豊度のより、高い、併し乍ら耕作地とするのにはより、困難な領域を克服することが出来たのである。而して斯かる事情は、「豊度の最も高い最も都合な條件にある土地が第一に耕作されるであらう」といふ經濟學上の根據が如何に薄弱であるかを亦立證して居ると。(上巻、五〇—五一頁及び五七頁參照)

支那の經濟社會の分析に對するウィットフォードの叙上の方法は、永い間神秘なものとなされて居た支那の社會生活の秘密を、その風俗習慣や支那民族の氣質すらも、總て支那に特有なるアジア的生產様式から發したものと説明することによつて、その眞實の様相を忌憚なく描出せんとするものである。其處では、特に歐米人によつて神秘と見えたものゝ根柢が、實はアジアに於ける特殊な生產様式にあつたといふ事が明確に指示されて居る。換言すれば、それは「神秘な」アジア的生活を、何等の神秘をも持たぬ赤裸々な物質的關係の中にこれを解消せしめつゝある所の資本主義的生活と同様に、一の物質的必然として説明する。

ウィットフォードのアジア的生產様式に關する方法論的規定は、その自然的契機に就ての把握と同様、全然批判の餘地なきものだとは言ひ得られぬであらう。併し著者が廣汎に亘る資料を基礎とし、一貫せる方法論的立場に立つて、複雑なる支那經濟社會の根柢を斯くも明快に分析したその功績は絶大である。こは正に前人未踏の境地を開拓した最もすぐれたる科學的業績の一つであると言へるであらう。勿論支那經濟の分析に當つての如上の方法や又その典據とした資料に就ての批評が加へられるであらう。だが此の勞作は、著者と立場を異にするものならば、その獨自の立場から、より、充分なる資料を根據として、又その信ずる研究方法に従つて、本書に比肩し得可き勞作を以て報ひたる場合に於てのみ初めて其の優劣が決定され得可きものである。それにしても支那經濟社會の研

究に長年月の歴史を有する我國に於て、斯かる意味での學問的著作さへ存して居らぬといふことは、頗る遺憾であると言はねばならない。

最後に邦譯に就て言へば、翻譯上非常に困難を伴ふ可き本書の如きが、頗る嚴密なる監修の下に其の全譯を完成し得た事を欣びたい。支那音の發音に従つて歐字に綴られた頗る多くの人名、地名、書名、官名、熟語等を、一々漢字に改めるだけでも非常な苦心であつたと譯者の言つて居ることは充分首肯される。更に之に加へて引用文献の夫々に就ての穿鑿や、アジアの農業テクノロジーに關する譯語の苦心や、又重要な術語に對して獨逸語のルビを附した周到さ等、その拂はれた努力が異常なものであつたことが推測される。譯文が場所によつては、餘りに嚴密を期したためか却つて難澁の嫌があるといふことや、支那の地名、人名等に對して嚴格な考證が拂はれて居るにも拘らず、例へば揚子江の揚が上卷を通じて全部楊と誤記されて居るが如き(下卷では揚となつて居る)、そういう細かい瑕瑾は見出され得るであらうが、それにも拘らず、此の科學的勞作に對する苦心の翻譯が、我國に於ける支那經濟社會の學術的研究、同時に我國自體に關する社會經濟史の研究上に資する所甚だ大なる可きは固より疑ひの餘地を存しない。其點に就て譯者の努力は充分に報ひられて居るものと言つてよい。吾々は更に本書の續編(第二卷)が原著者によつて一日も早く完成され、且つ本書に於けると同様に優秀なその邦譯が一日も早く吾々の机上に置かれる日を期待して筆を擱くことにしやう。

(一九三四—二二稿)

Simiand, F.: Les fluctuations économiques à longue période et la crise mondiale.

小 高 泰 雄

歐洲大戰以後既に景氣變動の所謂循環論的研究は現實的妥當性を制院せられてゐたが、此度の世界恐慌に際會して、かゝる研究に立脚する諸理論は、孰れも、恐慌前根本的缺陷を暴露するに至つた。而して、循環論的景氣論が世界恐慌を解釋する爲めに採つた態度の、一つの大ひなる傾向として我々は長期循環或は波動説が稱へらるゝに至つたことを看過し得ない。其の最も代表的なるものとしてカッセルの研究があり、(The supply of gold. Interim report of the Gold Delegation of the Financial Committee, League of Nations 1930, Annex v.)それを補足するキチンの研究(Supply of gold Compared with the prices of commodities. Interim Report of the gold Delegation of the Financial committee, Annex XI.)コンドランテーズ(Die langen Wellen der Konjunktur)の研究がある。更にシュムペーターも亦(The world depression 1931)に於いて技術の發展と結び付けた長期波動説を述べてゐる。この研究は既に恐慌前アフタリオン、ミチェル、クズネツツ等に迄見られるが最近一層強められ、新なる循環論の發展の方向を暗示するものゝやうである。ここに述べやうとするシミアンの前掲書も亦かゝる傾向に合流する一研